

報告 6

福建省武夷山市城村漢城遺跡における2022年度の発掘成果(国際シンポジウム 中国都城考古学の最前線3——秦漢都城と周縁域都市・城塞の考古学的新進展——)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-07-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 楼, 建龍, 陳, 穎 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/2000316

報告6 福建省武夷山市城村漢城遺跡における2022年度の発掘成果

楼 建龍（福建博物院・副院長）

1. 遺跡の概況

城村漢城遺跡は、武夷山市興田鎮城村の南西にあり、1958年に発見され、1961年に福建省文物保護単位と指定され、1996年に国家重要文物保護単位に指定され、そして1999年12月に世界文化遺産となり、2022年12月に国家考古遺跡公園に指定することに成功した。

城村漢城遺跡は1958年に発見されて以来、前後して60年余りの考古学的ボーリング調査と重点的な発掘を経て、城壁、城門、宮殿、工房、墓地等の遺構が発見され、また土器、瓦磚、鉄器、銅器等の大量の文物が出土した。こうした成果は、本城跡が内城（宮城）の外郭で、外郭の外に郊がある王城の構造になっていたことを証明している。城跡の総面積は14.6km²で、その内、宮城の面積は約48万m²がある。

2022年度に発掘した杉樹下遺跡は、城村漢城の西面城壁の外側、つまり西面城門と西水門の外に位置する。その南部は現在水田となっており、王殿壠に連なり、北部は林地と茶園であり、全体として北部が高く、南部が低い。今回申請した考古学的発掘の面積は500m²であり、この発掘の目的は城跡の西部にある道路と水路および防御施設の状況を確認することである（図1、図2）。



図1 杉樹下遺跡発掘区（西→東）

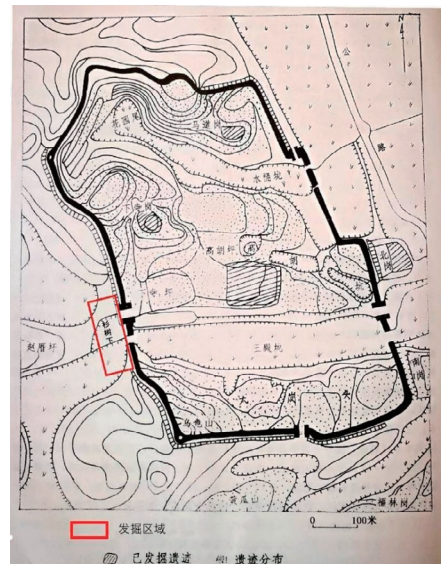


図2 杉樹下遺跡発掘位置図

2. 従来の考古学的調査と研究の略述

城村漢城遺跡は、1958年に発見されてから、1959年に初めて城址北側の馬道崗に対して発掘調査が行われ、城村古城の年代が漢代に属すると確定された。

1980年から、遺址に対して全面的かつ系統的なボーリング調査と重点的な発掘が行われた。これまでの発掘は主として以下のとおりである。1981年～1985年には、城跡の中部にある高胡南坪の甲組建物群跡に対して発掘を行った。1984年～1988年には、城跡の外側南東部にある北崗一号、二号建物跡に対して発掘調査を行った。1986年～1991年には、城跡の東面城門跡に対して数回の発掘と精査を行い、その結果、門道や門衛の詰所などの重要な遺構を発見した。1994年～1996年には、城跡の北西部の下寺崗遺跡に対して、2回の発掘調査を行った。以上の発掘調査の成果については、『1980-1996武夷山城村漢城遺跡発掘報告』を参照されたい。

1996年以後の考古学的発掘は主に以下のとおりである。1998年および2015年～2016年には、城跡の北面城門跡に対して2回の発掘を行った。2001年には、城跡北方の牛山大墓に対して発掘を行った。

2003年には、新亭園の4基の墓葬に対して発掘調査を行った。以上の考古的発掘の成果については、系統的に編集して、2022年に『1997-2020武夷山城村漢城遺跡発掘報告』を出版した。同時に、2022年度においては、さらにかつて閩北地区で行われた秦漢時代の遺跡に対する考古学的調査の成果を系統的に整理して、『閩北秦漢遺跡分布図』ならびに『閩北秦漢遺跡考古調査出土陶片紋飾匯編』等の資料を編纂した(図3、図4)。



図3 城村漢城遺跡の歴代発掘位置図

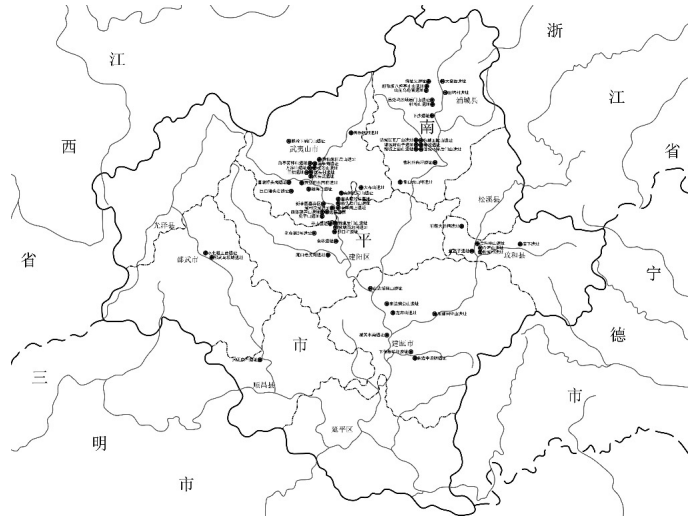


図4 閩北における秦漢遺跡分布図

3. 発掘の目的と作業計画

(1) 発掘の目的

現在、福建や嶺南などの旧百越地域において発見された秦漢代の城跡は20ヶ所以上に及ぶ。その中で、城村漢城は構造上の保存がもっとも際立って完全な諸侯王の城跡である。城村漢城の造営には、中原地域における都市造営制度の強い影響が及んでいると同時に、南方の重畳する丘陵や豊富な水流を十分に活用すべきでもあったことから、場所の選択や都市の構造などの諸方面において、「地に因りて宜しきを制す」という築城理念が色濃く反映されている。これまでの60年間の発掘は、主に城村漢城の建物、墓および東面城壁の本体部分に対しての作業であって、城壁内に入る城外道路や水系、および関連する防衛システムに対する系統的な発掘はまだ行われていない。そこで今回は、遺跡の中心部の西面城壁の外側を発掘およびボーリング調査の対象地区として選定した。その目的は、城村漢城遺跡と、同時期の空間や地理、気候や生物などとの関係性を分析するといった研究の視点から、西面城壁の外側にあった道路および水系の発掘とサンプリング調査を通して、城村漢城遺跡の西側における水陸交通のシステム、城の外堀、関連する防衛施設の実態を明確にすることであり、あわせて遺跡の西水門と西門の形態と構造を解明し、また城外から西水門に流れ込む水系の問題を解決して、城跡の性格と築造年代に関する理解を深める計画である。

(2) 調査の計画

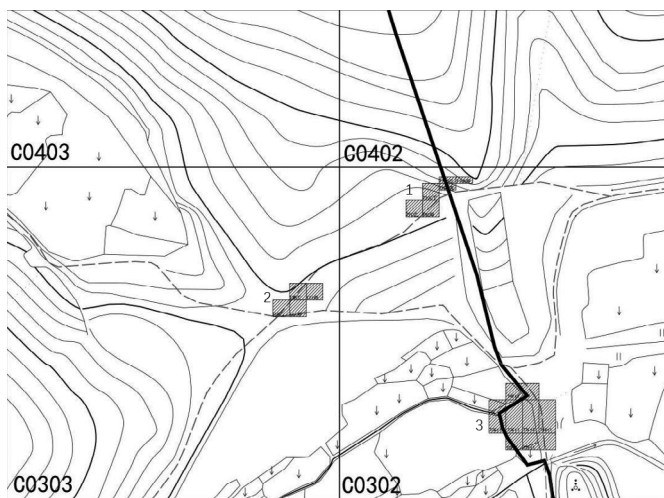
城村漢城遺跡では長年、考古学的調査が行われてきたが、今回の発掘を始めるにあたって、我々は完全な考古学的調査区分図(図3の大地区の方眼)、各区(図5の中地区の方眼)、発掘単位(図5の具体的な発掘区)、遺構単位等の整理番号システムを整え、以前に完了した歴代の発掘もその中に含めた。今回の発掘は、城跡の中心部以外の場所、すなわち西面城門と西水門の外側を選び、隣接地区において展開してきた考古学的ボーリング調査を結び付け、考古学的層位学、土壌微形態分析、植物考古学、環境考古学などの学際的研究の方法を総合的に応用して、関連する地層や遺構単位の埋蔵学(タフオノミー)と古地理学の情報を獲得する計画を立てた。同時に、漢城遺跡周辺の(地形測量を含めた)考古地理学の情報シス

テムを完全なものに整え、重要な遺跡単位に対して代表的な一連の年代測定のサンプルを選択的に採取し、炭素14、熱ルミネッセンス、古地磁気などの様々な方法による年代測定作業を展開した。発掘調査のプログラムは、課題目標の条件を厳格に遵守して順序どおりに推進し、国家文物局の『大遺跡保護「十四五」特定項目計画』の規定に基づき、既設の世界文化遺産監測システムに依拠し、パブリック・アーケオロジーの作業を適宜展開した。

今回の発掘は、福建省考古研究院と福建閩越王城博物館が主導し、出土遺物の保護に関わる人員は中国社会科学院考古研究所科技考古センター、文化遺産保護センターおよび福建博物院（閩北考古工作隊）、厦門大学、福建閩越王城博物館によって組織された。考古部門の責任者は福建博物院副院長兼福建閩越王城博物館館長の楼建龍である。

4. 調査の経緯

城村漢城の杉樹下遺跡における考古学的調査は2022年3月に始まり、前期はまず城跡の西面城門と西水門の外側でボーリング作業を行った。ボーリングは189ヶ所、平均深度は2.5mである。その結果、西面城門の外で、内・外二本の南北方向に走る堀が見つかった。内側の堀は、西面城壁の伸びている方向と流れの向きは一致し、西面城門から15m離れた場所にあり、幅は約4m、深さは3.1mである。外側の堀は、西面城門から55m離れており、その主要な役割は王殿壠の水路と苦竹巢の水路とをつなぐことであり、東西の幅は約12m、南部の長さは40mである。北部は人為的に破壊されていたため、測量できず、また深さもボーリング作業の途中で水が湧き出たため、観測できなかった。西水門の外側でボーリング作業を行った結果、西水門の外側にあった水路は幅約13.4m、深さは約4mであることが一応確定された。



注：1.西城门及内壕沟发掘区
2.外壕沟发掘区
3.西水门外发掘区
西城门及内壕沟西南距外壕沟46米，南距西水门73米，外壕沟东南距西水门78米

図5 杉樹下遺跡の発掘区位置図

ボーリング作業を通して、今回の発掘におけるグリッドの位置を確定した（図5）。野外発掘作業は2022年6月から始まり、本年度の発掘区として西水門の外側（図6）、西面城門の外側（図7）および外側の堀（図8）の3地点を選んで発掘作業を行い、西面城門・西水門外の道路と水路状況を明らかにしようとした。本年度の発掘では、5×10mのグリッド6ヶ所（整理番号2022WYCHSC0302T2FT1、T3ET1、T3FT1、T3FT2、T3GT1、T4FT1）、5×5mのグリッド8ヶ所（2022WYCHSC0302TF乙、T9C甲、T9C乙、T10C丁、2022WYCHSC0303T6H甲、T6H乙、T7HT、T7I丙）、2×5mのグリッド3ヶ所（2022WYCHSC0302T10D甲、T10D乙、T10D丙）を配置した。発掘面積は合計で530㎡。発掘期間中に、中国社会科学院考古研究所、厦門大学の専門家を招待して指導を仰いだ。そして、厦門大学・福建師範大学と共同で、有機質遺存標本の年代測定、および古地理学と水文状況に関する研究を進めた。

5. 土層の堆積

杉樹下遺跡の地層は四層に分けられ、第4文化層は西面城門の外側にしかない。西門外に漢代の堀跡があり、西水門の外側には漢代の基壇と水路跡がある。西水門は水田の中にあるため、その堆積は西門外の内堀と外堀とは異なっている。そこで、西面城門の外堀と西水門外側の地層堆積をそれぞれ述べる。



図6 杉樹下遺跡西水門外の発掘区全景（俯瞰図）



図7 杉樹下遺跡西門外の内堀の発掘区全景（南→北）



図8 杉樹下遺跡の西門外堀の発掘区全景（東→西）

(1) 外堀の土層堆積：2022WYSCHS0303T6H甲とT6H乙南壁を例として（図9）

第1層：表土と擾乱層である。南側が厚くて北側は薄い。厚さは0.1～1.2mである。南壁の東（左）にある高い部分が黄褐色の道路土と擾乱土である以外は、すべて灰黒色土である。その中には植物の根が大量に含まれており、少量の青花磁器の破片が出土した。

第2層：明清代の堆積であり、二層に分けられる。

2 A層：黄褐色粘土で、粗粒砂が混じり、緻密であり、厚さは約0.15～0.3m。植物の根が大量に含まれ、少量の青花磁器片、漢代の土器片、瓦片が出土した。

2 B層：黄褐色砂質土で、緻密であり、厚さは0.3～0.4mである。大量の青花磁器片、少量の漢代の土器片と瓦片が出土した。

第3 B層：唐宋代の堆積である。黄褐色砂質土で、緻密で、厚さは0.25～1.0mである。宋代の青白磁器片、黒釉蓋片、漢代の土器片と瓦片が多く出土した。この層の下には、一本の南北方向の唐宋代の堀が埋まっていた。その整理番号は2022WYSCHS0303G3（以下G3と称す）である。G3は三層に分けられ、地表から約0.95～3.2mの深さがある。G3の下には漢代の堀が埋まっていた。この堀の方向はG3と同じで、整理番号は2022WYSCHS0303G4（以下はG4と称す）である。G4は四層に分けられ、その下は風化した基盤岩がある。G4の地表からの深さは約0.25～5mである。

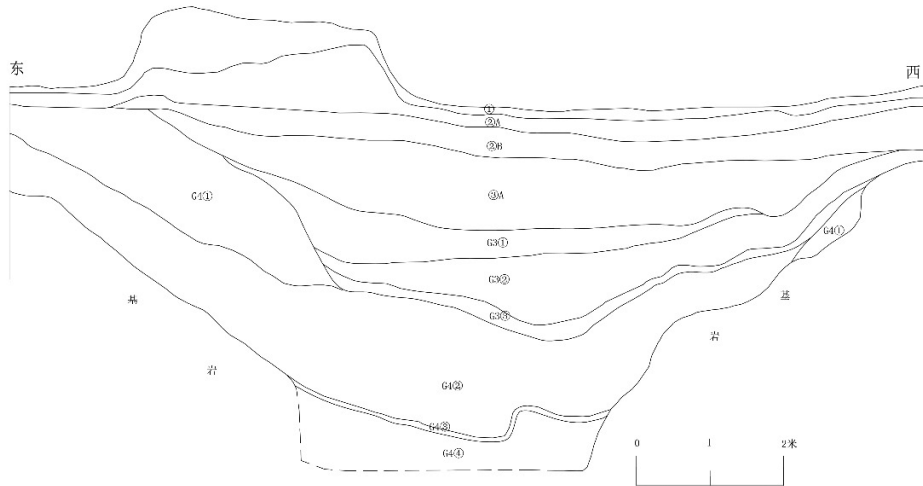


図9 杉樹下遺跡の外堀T6H甲、T6H乙の南壁断面図

(2) 西水門外の地層堆積：2022WYSCHS0302T3FT2の東壁を例として（図10）。

第1層：現代の擾乱層。上半部は現代の碎石敷農道であり、下半部は黄褐色の擾乱層である。この層は北側が厚くて南側が薄い。大量の礫が含まれ、緻密である。厚さは約0.3～0.75m。少量の青花磁器片、土器片と瓦片が出土した。

第2層：明清代の堆積層である。黄色を帯びた灰褐土であり、締まりがない。厚さは約0.3～0.75mである。少量の青花磁器片、土器片と瓦片が出土した。

第3層：唐宋代の堆積で、二層に分けられる。

3 A層：灰褐色の粘土層であり、比較的柔らかい。厚さは0.5～0.6m。少量の青白磁器片、布目瓦片、黒釉蓋片、土器片、瓦片が出土した。

3 B層：灰褐色の粘土であり、粗粒砂が含まれ、土壌は比較的柔らかく、厚さは0.6～1.1mである。多くの碎石が含まれ、少量の青花磁器片、布目瓦、黒釉蓋片、土器片、瓦片が出土した。この層は、東西に流れる漢代の溝を覆っており、その整理番号は2022WYSCHS0302G5（以下G5と称す）である。G5は二層に分けられ、その下は青白色の泥質砂である。G5の深さは地表から約2.7～4.2mである。

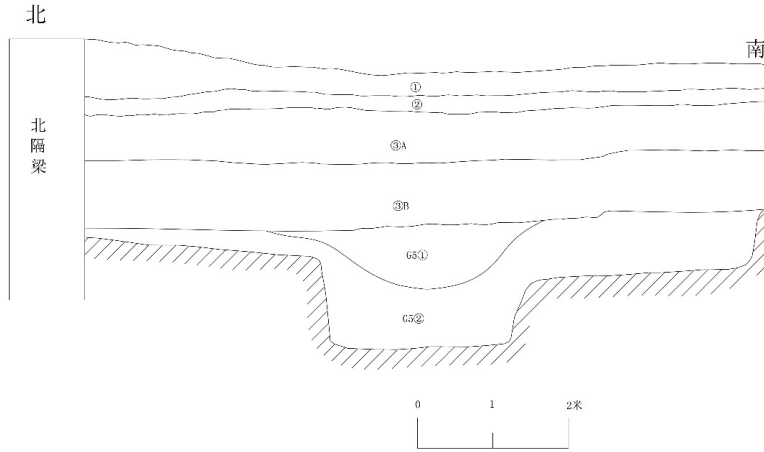


図10 杉樹下遺跡の西水門外T3FT2東壁断面図

6. 主な遺構

今回の発掘で精査した遺構の数は少ない。出土遺物と地層の堆積状況により、次の三期に分けられる。

(1) 第一期

前漢の閩越国の時期にあたる。発見された主な遺構は、2022WYSCHSC0302T10D甲とT10D乙内の西面城門の城壁、瓦と礫が倒壊した堆積、西面城門外の内堀2022WYSCHSG2、外堀2022WYSCHSG4、西水門の外側にある水路遺跡2022WYSCHSG5である。

④B層 ④B層は瓦と礫の倒壊堆積層であり、西面城門の現在の道路の北側にあるT10D甲とT10D乙の内側に位置している。その下には版築の城壁が埋まっており、ボーリング調査によって道路の両側が分布していることが確認された。ボーリング調査と発掘に基づく、西面城門の門道は唐宋代に破壊され、村民が水田に通いやすくするため、西面城門の門道に細道を1本掘り開き、それは現代でも使われている。西面城門の門道の北側路面と城壁は、一部分が破壊された。

G2 G2は西面城門の外側に位置する内堀で、南北に走り、方向は177°（北で東に3°振れる）で、北側が高く南側が低い。その東西幅は約5m、堀の底幅は0.5m、地表からの深さは約4.6mがある。堀の底の海拔は高度181.5mで、その上に③B層が重り、内堀の開口層はすでに破壊されていた。堀の埋土は四つの小層（G2①～④）に分けられる。発掘に基づく、G2は城壁を建築した時に開削されたもので、一部風化岩を掘り抜いている（図11）。

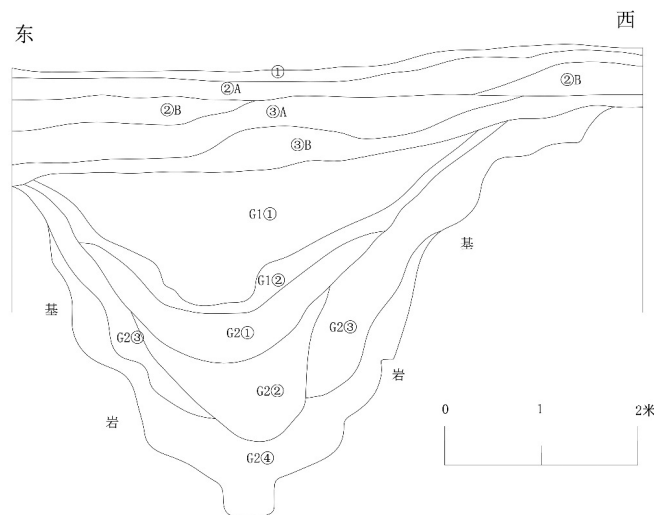


図11 G1、G2断面図

第1層 (G2①)：浅黄褐色粘土層で、粗粒砂が混じり、土質は比較的柔らかく、厚さが0.1～0.5mである。少量の木炭粒が含まれ、土器片と瓦片が多く出土した。

第2層 (G2②)：黄褐色砂層で、粗粒砂が混じり、土質は比較的柔らかく、厚さが0.5～0.8mである。少量の粒木炭が含まれており、多くの土器片と瓦片が出土した。

第3層 (G2③)：赤褐色土で、粗粒砂が混じり、土質が比較的柔らかく、厚さが0.1～0.5mである。少量の粒木炭が含まれており、少量の土器片と瓦片が出土した。

第4層 (G2④)：浅紅褐色粘土層で、粗粒砂と風化岩砂が混じり、厚さが0.1～0.75mである。非常に少量の土器片と木炭粒が出土した。T9C乙グリッドのG2底部を精査した時に、炭化した竹で編んだ遺物が発見された。

G4 G4は西面城門外で見つかった外堀で、西面城門から46m離れており、南北に走り、その方向は323°（北で西に37°振れる）である。東側が高く西側が低く、その東西幅は約10m、底部は地表から6.2mの深さで、底幅は2.5m、海拔は高度178.2m。外堀の埋土は四つの小層に分けられる（図12）。

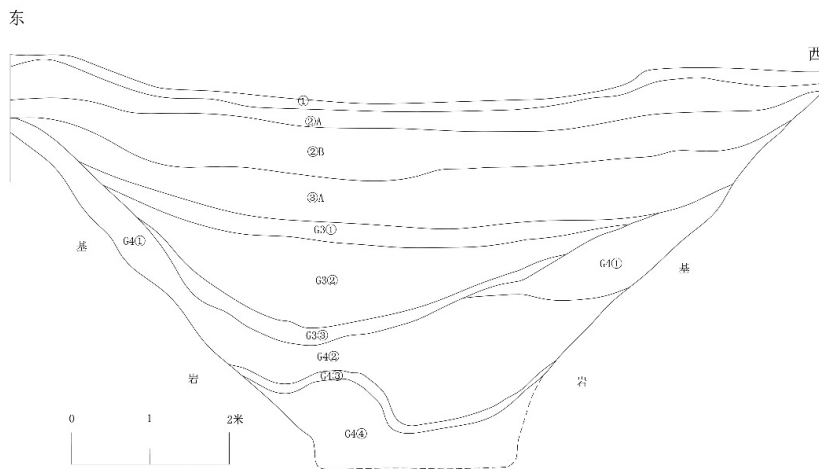


図12 G3、G4断面図

第1層 (G4①)：赤褐色砂土層で、厚さは0.1～0.75m。少量の炭化粒が含まれ、少量の土器片と瓦片が出土。

第2層 (G4②)：黄褐色粘土層で、多くの粗砂が混ざり、厚さが0.1～1.3mで、少量の土器片と瓦片が出土。

第3層 (G4③)：黄褐色砂土層で、比較的固く、厚さが0.1mで、非常に少量の土器片と瓦片が出土した。

第4層 (G4④)：灰褐色シルト層で、厚さ0.1～1.1mで、少量の土器片と瓦片が出土した。

G4の壁と底は基盤岩で、南部は王殿壠の水路とつながり、北部は苦竹巢の水路とつながっていた。地形と発掘に基づく、G4の役割は冠水期に王殿壠の水路で余った水量を、苦竹巢の水路によって城村崇陽溪の上流まで導くことであったと考えられる。



図13 西水門外側の遺構

G5 G5は西水門外の発掘区内で検出された東西に走る1本の堀で、G5と整理番号がふられた。この堀は王殿壠水路の一部である。方向は245°（北で西へ115°傾く）で、南北の幅が約3m、地表から底までの深さが約3.9m、底幅2.1mで、底の海拔は高度178.9mである（図10、図13）。埋土は二枚の小層に分けられる。

第1層（G5①）：灰黒色シルト層で、少量の粗粒砂が混じり、土質が柔らかい。厚さは0.1～0.9m。漢代の土器片、瓦片、植物の種が多く出土し、また少量の木片も発見された。

第2層（G5②）：黒青色シルト層で、少量の粗粒砂が混じり、土質が柔らかい。厚さは0.1～0.8m。少量の漢代の土器片と瓦片が出土した。この層には直径0.1mほどの多くの枝と若干の樹根が含まれていた。この層の下には灰白色砂土があり、比較的緻密である。

G5の南北両側には台地のあることがわかった。その内の南側の台地は三級に分けられ、北側の台地は近代の水路によって破壊された。

（2）第二期

唐宋代にあたる。主に一本の路面（整理番号2022WYSCHSL2）と二本の堀（整理番号2022WYSCHSG1、G3）が発見された。

L2 2022WYSCHSL2（以下L2と称す）は、西水門の外側に位置し、T4Ft1、T4Ft2の内側にある。その上には③A層が重なっており、下には③B層が堆積していた。この道路は東南から西北に向かって走っている。埋土は灰褐粘土層で、多くの礫が含まれ、比較的緻密であった。幅は約3m、厚さは0.25m。発掘によって多くの土器片と青磁片が発見された。その西側で約0.4mの幅の乾燥したススキで舗装した遺構が発見された。その両側には木の杭が打ち込まれ、間には木の杭が挟まれていた。これは西側にある水田を固めるための施設であったと推測される（図14）。



図14 西水門外の路面L2及び西側のススキ舗装遺構

G1 G1は西面城門外の内堀の中に位置する。開口部は③B層の下にあり、開口部は地表からの深さは約1m、厚さは約1.2m、幅は約5.4mであった。それが伸びている方向はG2と同じで、漢代の内堀G2が使われなくなった後に作られたものである。その埋土は二枚の小層に分けられる。

第1層：黄褐色粘土層で、粗粒砂が混じり、土質は比較的緻密である。厚さは0.1～1.4mで、唐代末期から宋代までの磁器片と漢代の瓦片が多く出土した。

第2層：灰褐色粘土層で、細粒砂が混じり、土質は比較的柔らかい。厚さは約0.1m。唐代末期から宋代までの磁器片が少量見つかった。また漢代の瓦片が多く出土した。

G3 G3は外堀の中にあり、南北に走っていた。③A層の下に埋まっていた、地表から開口部までの深さは1.7m、厚さは約1.5mで、G1と状況は同じであった。漢代の外側の堀であるG4が廃棄された後に作られたもので、その下にはG4の第1層が埋まっている。その埋土は三枚の小層に分けられる。

第1層：灰黄色砂質粘土層で、粗粒砂と細礫が混じり、土質は比較的柔らかい。厚さは0.1～0.7m。青白磁器片、土器片と瓦片が多く出土した。

第2層：紅褐色砂質粘土層で、土質は比較的柔らかい。厚さは0.15～0.9m。青白磁器片、土器片と瓦片が少量出土した。

第3層：黒褐色粘土層で、比較的柔らかい。厚さは0.1～0.3m。青白磁器片、陶片と瓦片が少量出土。

(3) 第三期

明清代である。主に二本の路面が見つかった。整理番号は2022WYSCHSL1、L3（以下前者をL1、後者をL3と呼ぶ）。

L1 路面L1は西面城門外に位置し、東西に走り、内堀と外堀の上を横切っている。内堀の上を横切る部分は、紅褐色粘土で、粗粒砂が混じり、緻密である。外堀の上を横切る部分は、黄褐色から灰色を帯びた粘土で、粗粒砂が混じり、比較的緻密である。

L3 路面L3は西水門の外側のグリッド2022WYSCHS0302T4Ft1、T3Ft1、T3Et1およびT2F乙の中にあり、路面にはガチョウの卵大の石が敷かれていた。その幅は約1.2m、全長は約22.1mで、上下二段に分けられる。第1段は、T4FT1、T3FT1中にあり、東北から西南の方向に走っており、長さは約10.5mであった。第2段は、T3ET1、T2F乙中にあり、東南から西北の方向に走っており、長さは約11.6mであった。L3の中央は大型石材で舗装され、その両側にはガチョウの卵大の石が敷かれていた。石の下には直径10～15cmの木の枝が置かれていた。道路が途中で曲がっている箇所は、破壊されていた。

7. 出土遺物

今回の発掘調査では、計4500点の遺物が発見された。その内、70%が瓦片と土器片で、30%が磁器片である。鉄器は極めて少量で、その中の小型製品は30点余りである。

瓦片は、主に漢代の平瓦、丸瓦、少量の軒丸瓦、床敷用埴、そして、宋代の瓦片である。軒丸瓦はほとんどが破片であり、弁別できるものとしては雲文軒丸瓦（図15-2）、「常楽」と「万歳」の文字文軒丸当（図15-1）がある。床敷用埴もすべて破片で、その文様は菱形である（図15-3）。土器・土製品の破片は極めて少なく、器形は、主に深鉢、鉢、坏、釜、支脚、重し等があり、復元できるものは極めて少ない（図16）。

磁器片は、青磁と青花磁器などがあり、大多数は破片で、復元できるものは少ない。器形は坏、碗などであり、大多数は宋代と明清代のものである。碗の底部の多くには墨書があり、ごく少数であるが晩唐から五代に遡るものもある（図17）。

以上のほかに、今回の杉樹下遺跡の発掘において、福建師範大学と共同で、漢代の水文情報を多く収集するために、王殿壠の水路と西面城門外の苦竹渠水路に対してボーリング調査を行い、土城サンプルを採取した。同時に、厦門大学と共同で、遺跡において漢代の地層、および堀跡の中から採取した土壌に対して水洗選別（water separation）を行った。その過程で、西水門の外側にあるG5①層の一部の土壌に対して水洗選別を行った際に、植物の種子が発見された（図18）。そして、木炭中の青色に光る粉を分析したところ、これは藍鉄鉱である可能性が高いと推測された。路面L2西側のススキを舗装遺構の中にあつた木の枝に対するサンプリング分析によって、樹種がクスノキと同定された（図19）。また、西面城門外の④B層の倒壊堆積物中の2ヶ所で発見された木炭に対してサンプリング分析を行ったところ、初歩段階の結果であるが同一樹種とされ、どちらもカシワ属の植物の樹幹と同定された（図20）。以上の結果は、いずれも当時の環境や水文状況を検討するために重要な情報を提供している。



1. 文字文軒丸瓦



2. 雲文軒丸瓦

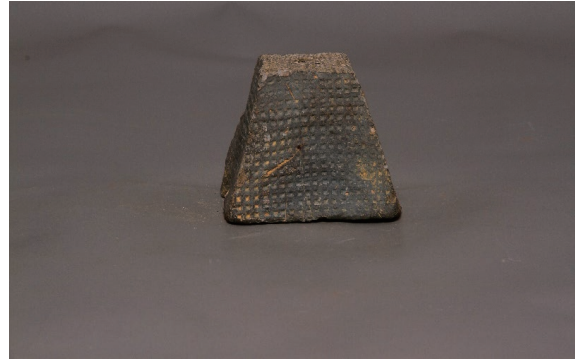


3. 床敷用文様磚

図15 杉樹下遺跡出土の建築材料



1. 坏形土器



2. 土製重し



3. 鉢形土器



4. 釜形土器



5. 盒子



6. 深鉢形土器



7. 土製支脚



8. 土器の把手

図16 杉樹下遺跡出土の土器・土製品



1. 坏



2. 碗



3. 底部の墨書



4. 黒釉碗

図17 杉樹下遺跡出土の磁器

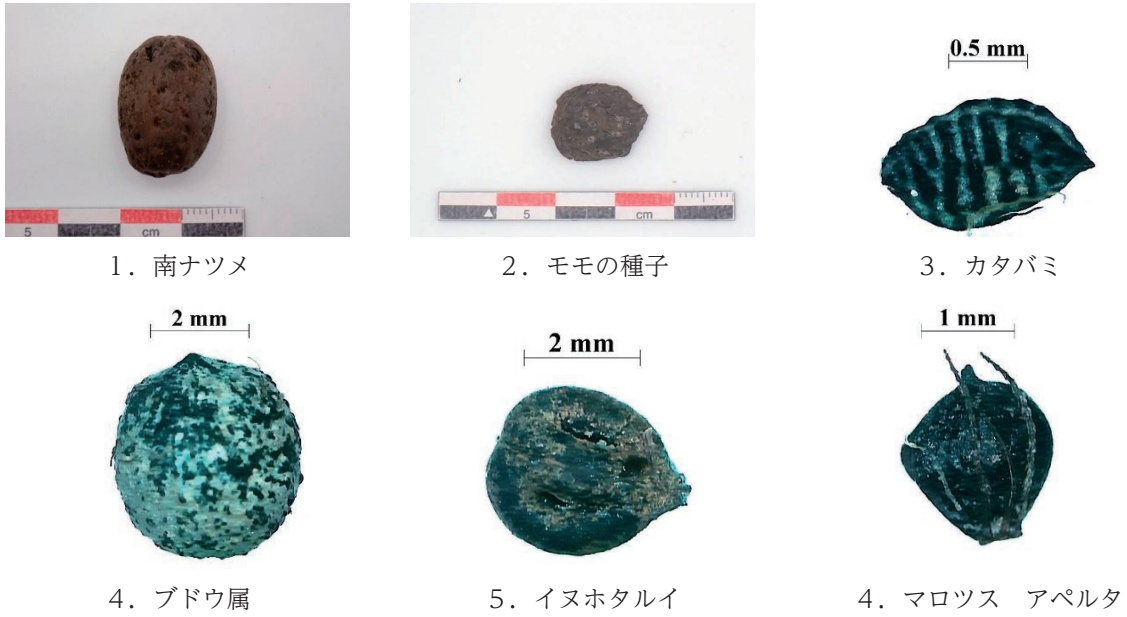


図18 杉樹下遺跡で水洗選別された植物種子

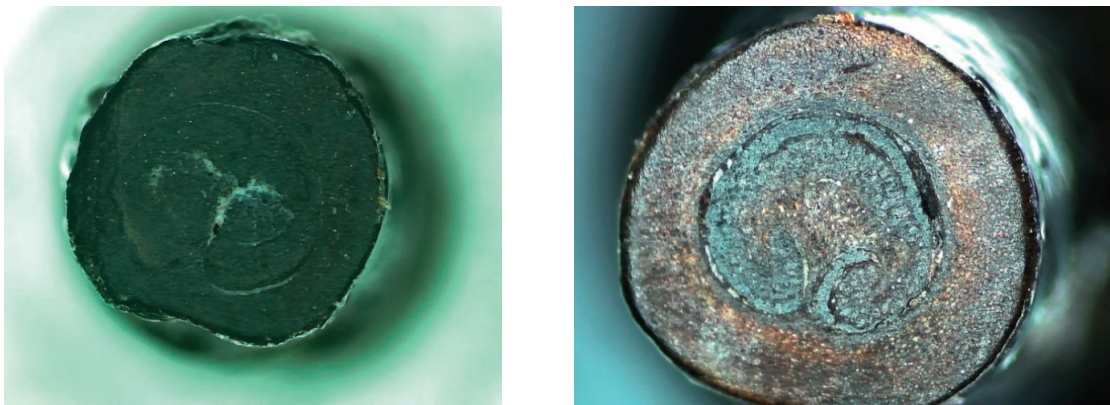


図19 T3Ft1内で採取された路面L2西側のクスノキのサンプルと現代のススキのサンプル

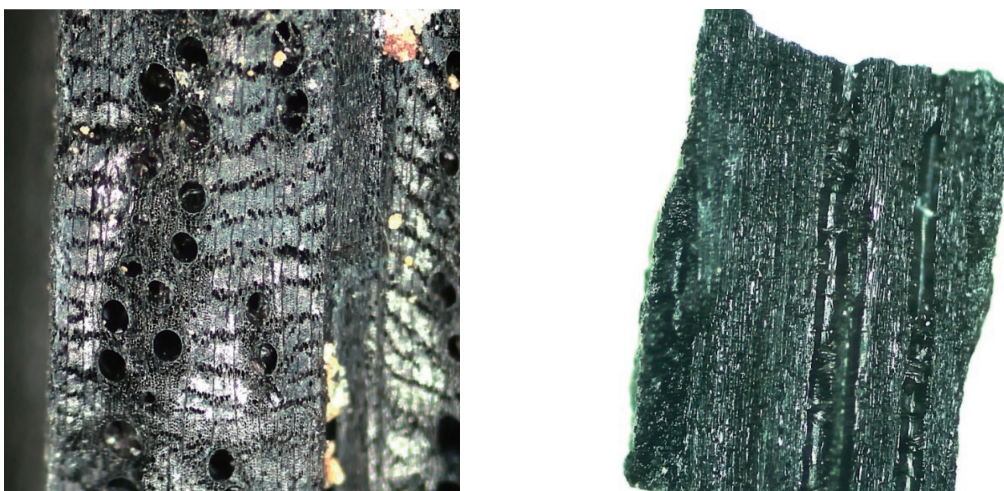


図20 西門外第1・2平場で採取されたカシワ属木炭の断面切片

8. いくつかの知見

今回の発掘によって、西面城門外の道路と水系、および防御施設の状況が明らかにされた。発掘を通して、西面城門の門道と門道外にあった道路は、明清代に開削された仮設道路によって破壊されたことが分かった。その仮設道路の南北両側でボーリング調査を行った結果、倒壊した瓦と礫の堆積が発見された。西面城門外の堀は、当時人為的に開削されたものであり、外堀跡G4の底部の高さと西水門G5の底部の高さを測量したところ、G4とG5の底面はほぼ同じレベルにあることが分かった（図21、図22）。この結果から、外堀は王殿壠水路と苦竹渠水路を繋げるものであり、その目的は王殿壠の冠水期の排水量を調節するためだとわかった。また、王殿壠の水源が城村崇陽溪の上流であるという推論も排除されたのである。西水門外の発掘は、西水門の幅と構造を解明するために重要な情報を提供した。そして、以上の発掘調査の結果は、まず今後の城村漢城の西面城門と西水門の発掘に対して重要な参考価値のある資料を提供し、また城村漢城の西側の水陸交通のシステム、城の堀と関連する防衛施設の研究に対しても非常に重要なものである。

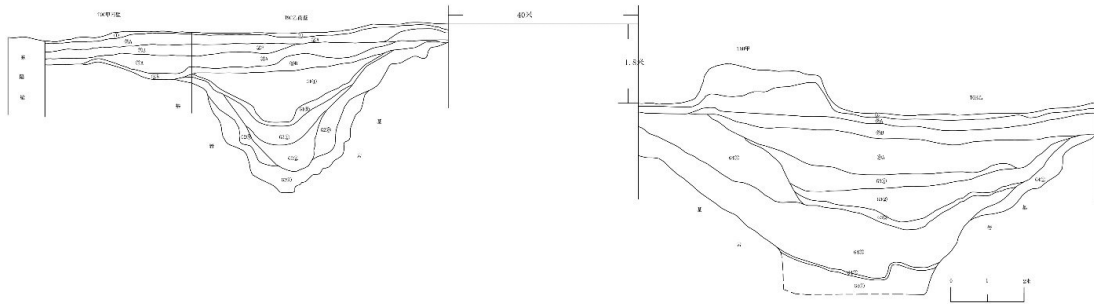


図21 杉樹下遺跡のG4埋土の東西対比図

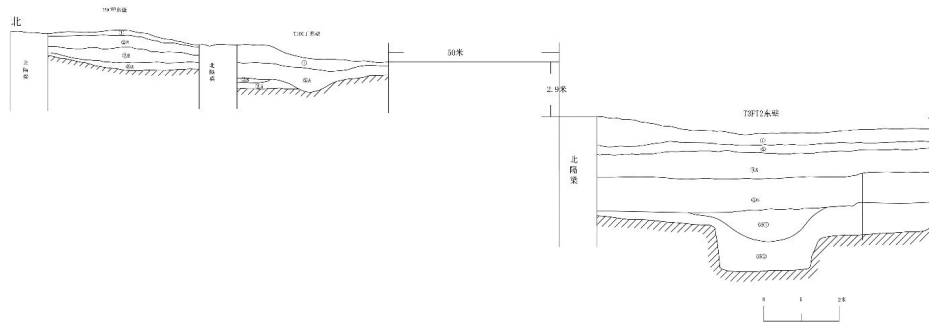


図22 杉樹下遺跡のG5埋土の南北対比図

翻訳：陳 穎（東北大学文学研究科・大学院生D3）